

---

# オリオン座と甘酒

YukI\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オリオン座と甘酒

### 【著者名】

Yuki\*

N7280F

### 【あらすじ】

綺麗なものは、一番大好きな貴方へ。

夜空に携帯電話のレンズを向けた。

画面に映る空。手のブレが酷くて、画素の低い四角の枠は荒っぽい黒色。

試しに撮影ボタンを押して撮つてみる。ぱしゃりと小切れの良い音。しかし、表示されたのは黒い絵の具を無茶苦茶に塗りたくったみたいな不恰好な写真。

違う。撮りたいのは、「こんな空じゃない」。

ため息をつくと、毛糸のマフラーの網目から白い息が漏れた。

私はクリアボタンを押しながら、東の冬空を見上げる。  
狭い住宅街の屋根の向こう、蔓延<sup>はび</sup>った電線のそのまま向こう。  
あまり高くない位置に、オリオン座が居座っていた。他の星座を  
無視して、我が物顔で堂々とスペースと人目を独占している。  
本当は11の星で構成された星座なのだけれど、私の視力では7  
までが限界。

でも、ひとつひとつが綺麗だつてことは充分わかる。  
ダイアモンドが黒い絹に散りばめられてるみたい。……なんて、  
幼稚な表現しか出来ないボキャブラリーが切ないのだけれど。

『オリオンって間抜けだよな』

学校からの帰り道、彼が呟くように言つた言葉が蘇る。

オリオンといきなり言われても、私の検索機能は低性能で、グルみたいにフォームに打ち込んだだけで予測言語が出てくるわけじゃない。

星座だよ、と彼が言つまで、しばらく何のことが分からなかつた。

『星座になつてまでサソリを避けるなんて、アホらしい』

多分彼は、理科の授業で星座を習つてきたのだろう。

文系を選択している私は、中学で習つた知識を搔き集めながら、突き放したような彼の話し方に必死でついて行つた。

『サソリ座は冬に出ないんだっけ?』

『そ。サソリが沈んでから、オリオンは堂々と空を占拠するわけ』

オリオンは無敵の狩人、サソリはオリオンを倒した唯一の生き物。付け焼刃の曖昧な知識が脳の奥に引っかかる。多分、子供の頃見た絵本か何かから得た知識だろう。

オリオンは自分の腕に自信があつた。だから、それを壊したサソリが怖い。サソリさえ居なければ、オリオンは無敵

彼の眼鏡の奥の目はひどく違観していて、少し冷たく見えた。

『まあ、俺は見たことないんだけど』

『なんで?』

『ガキの頃から田が悪かったから』

飄々とした態度で返して、彼は歩き続ける。

そつか。私も一言で終わらせた。

星は、視力に異常の無い私から見ても、小さくて見づらい。それを、眼鏡で補正しても少し弱い彼の目が捉えられるわけがなかつた。

その場は、納得したのだけれど。

私はもう一度、夜空にレンズを向ける。

こんなに綺麗なのに、見たことがないなんともつたいたい。  
彼を見せたい。見せてあげたい。

あの達観した田を、驚きで見開かせてやる。

左。

……いや、もう少し右。

携帯電話を夜空に構えて、うらうらじてこする姿は、他人の田にどれだけ滑稽に映つていいんだろうか。

恥ずかしい。

諦めたい。

でも、見せたい。

恥を殺して、田の前の画面に集中する。

堂々と氣位の高いオリオン座を、四角い枠の中に閉じ込める。

そこだ。

手が動かないように。自然と息を詰めながら、慎重に撮影のボタンを押す。

ぱしゃっと音のするまでの1秒間が、三十倍ぐらい長く感じられた。

画面に表示された七連の白い粒。

あまり綺麗ではないけれど、見せるところ田的は達成である。

上出来だと自分に言い聞かせた。仕方がない、何年か前の型だし。

携帯電話のせいにしながら、彼にメールを打つ。

一行、二行。絵文字を文末に引っ付けながら、文字を連ねていく。三行目まで打つて、少し長いかと躊躇ためらつて、まあいつかと写真を添付した。

“送信しますか？”

OKを押すまでの時間は、シャッターを切るまでに掛かった時間の三十倍短かつた。

数分後、彼から返信されたメールは素つ気無かつた。

“風邪引くぞ。早く家に入れ。”

相変わらず顔文字ひとつ無い。  
もう少し何か書いてくれてもいいじゃない。  
確かにその通りなんだけどさ。

図々しく言葉をねだる自分を抑えられないまま、最後の行を見る。

“甘酒美味い。”

……って、それで終わりかよ！－！

というか、私甘酒飲んだことないんだけど－－！

軽く啞然あぜんとしながら、それでも口元が綻んでしまつ自分が馬鹿らしい。

冷たい瞳で画面を見つめながら、顔色ひとつ変えず子供みたいな文章を送ってくるところを想像して、少しこっけてしまつ。

たつたこれだけのことだ、それまでの軽い苛立ちはせびりへやう。我ながら、本当に彼には甘い。

ファイルが添付されていることに今更気づいて、開いてみる。なんだろう。彼が何か送つてくるなんて珍しい。ドキドキしながら開いたそのファイルは。

甘酒が並々と注がれた、白いマグカップの『真だつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7280f/>

---

オリオン座と甘酒

2010年10月27日08時09分発行